

政府状態の中で食を求め身を守る毎日。街にはソ連、八路、中国の兵が氾濫している。死骸の山。難民は倒れるな祖国の土を踏むまでと励ましあった。

夢遊病者のように翌年七月帰国船に乗った。国破れて山河あり、山が見えた。感涙滂沱たり。

## ホロンバイル死の脱出行

岩手県 折居次郎

満州でいちばん西北の国境地帯ホロンバイルにいたので、あの頃はソ連が敵だと誰しも思っていたし最初に戦火に巻きこまれる運命にあるんだと覚悟はしていた。しかし、ここが戦場になり、一時避難することがあっても、興安嶺の向こう側までであり、やがてはまたもどつてこられるものと、関東軍と日本を信じていた。

応召者があいつぎ、女と子どもだけの家では心細いかぎり、隣り近所が相寄り、いっつどんなことが起こるかわからないので、警察や憲兵隊と相談し、連絡していた。

開戦となると、すぐ戦場になるので、いつでも脱出できるように、どこの家でも、リュックに、最低オムツ、ネンネコと少しの着がえを揃えていた。

八月九日、ソ連軍が侵入してきたらしいとの情報、翌十日朝、団に情報を取りに行ったところ、早馬で団に行く警官と会い「駅に最初の避難列車が着いて待っている、すぐ乗るように」と連絡を受け、急いで引き返し、合図の鐘をならし、馬車をいそがせ、駅に着き、今まさに発車せんとする無蓋貨車にとびのった。座る余地のない満員の中にわりこんだ。

運良く免渡河を脱出できた。前々から準備していたはずなのに、着のみのままであった。興安嶺の長いトンネルの中は、煤煙と水滴で、子どもたちが苦しがり、おとなでも死ぬかと思うほど。やっとチチハルについた。

チチハルでは開拓会館にはいった。ハイラルを引揚げた人たちが一杯。ここで、二、三日炊出しの接待を受けたが、南下するというので、乗車した。着いたところは、ハルビンで、八月十六日だった。

ここにきて、本格的な避難生活がはじまった。すこし

の配給はあったが、とても生きていける量ではなく、急激な生活の変化と異常な環境に耐えられず、子ども達が弱りはじめ、この二か月で、幼い子六人が死んだ。主に肺炎と下痢による衰弱が原因だった。

十月十五日、花園小学校から満拓公社へ移った。二階の一室にわりこんだ。そのころは治安が悪く、ソ連兵の横暴に身をちぢめる日が続いた。さいわいに、おとなが五人いたので、仲間から被害は出なかった。

十月末、男子全員が、どこともなく連れて行かれ、四十日後に牡丹江から全員ぶじに帰ってくるという事件もあった。

食糧の配給はなく、六十数人の毎日の生活には困難がともなった。脱出時に団の金庫にあった金、各人の所持金を集めて、一日でも食いのばそうと計画的に工夫した。

アワやおかゆの中にカボチャを入れたオジヤが主食、しかも腹一杯食べられない。幼い子が栄養失調で倒れ、シラミ、チフス、弱った体に風邪、肺炎と手あてする方ははなく、苦しみ、死んでいった。

満拓公社の避難生活中に、五人の赤ん坊が生まれたが、栄養失調の母親に乳が出ず、幾日もたたず、息たえた。

暖房のない酷寒のハルビンの部屋で、体を寄せあい、寒さをしのがねばならない。この満拓公社での七か月の避難生活で、おとな三人、子ども十一人、赤ん坊五人が死んだ。私の子も、十二月六日、九日に死んだ。

地獄での生活はつづく。五月二十五日、沙曼屯の日本人商業学校へ移動となった。満拓公社がソ連に接收されたからである。

日本へ帰還できる、という明るいニュースがながれてきた。しかし、お金はなくなり、白活のため、働ける者は働いて、皆の食糧を確保せねばならない。しょう油売りをしたり、ソ連軍将校の手つだいなどをした。しょう油一人五本を背に負い、電車に乗り、遠い所へ売りに歩いた。

八月二十二日、引揚げ命令がきた。ハルビン駅に集合。カンパン四日分もらい乗車、着いた所は吉林。ここで二、三日待たされた。

やがて徒歩で老翁嶺を越えるのであるが、どこをどう歩いたのか、どこに着いたのか、夜中に声を出さずに、前の人に遅れまいと夢中で山越えした苦しい思いだけのこった。生と死の集団行進だった。

また無蓋車に乗り、錦州に九月六日、コロ島に九月十一日に着いた。

十月二日佐世保に上陸。

## 思い出

山形県 小玉 静 江

満州国協和開拓団にソ連兵の自動車が止まるとサイレンが鳴り、女の人は逃げろという合図である。私達勤務奉仕隊の者はいつでも逃げられる準備をしていた。

ある寒い晩、サイレンが鳴り響いた。靴を履いたが紐を結ぶ暇もなく走り出した。霜柱が立っている真夜中、畑の中で靴紐を踏んでは転び、起きては転びを繰り返して、しまいには靴を手に、裸足で隣の昭栄部落に着いた。

昭栄部落の人々は親切にも風呂の湯で足を洗わせてくれた。しかし、いきなり風呂の湯で暖めたためズキンズキンと一時間ばかりは痛くてたまらなかった。

ソ連兵と交渉の結果、私達は連れて行かれなかったが、学校に集まり、最後の夜が来たのだと手造りの槍を持たせられ、死ぬための青酸カリの薬をもらったときは、体の中までズーンと冷たくなった。夜が明けたら死ぬのかと思ったとき、国にいる母の顔が目浮かび、とめどなく涙が流れたのを忘れることができない。

春になってようやく治安もよくなって団本部からチチハルに出るといので私と太田キクさんの二人が一緒に歩いていくことになった。

チチハルでは二か月間八路軍の炊事をした。女だけの二人で心細い毎日である。六畳間でカーテンもないガラス窓から毎晩お月様が皎々と照らすのでした。ある晩、匪賊が来たと知らされて窓際に頭をくっつけて外から見えぬようにして寝たけれども南京虫に食われて朝まで眠れないこともあった。

昭和二十一年十月三日朝、チチハルから一か月余か